

だ てん し
墮天使のお気に入り

暗闇に浮かぶ、ライトアップされた桜並木。四月に入ると日中の気温は上昇し、満開に花の咲き誇る公園もちらほら見受けられたが、ここはまだ七分咲き。

それでも親指と人さし指で額を作り、それらの桜を中心に収めれば、描き写された絵のようにとても美しかった。

枝を揺らす冷たい春風が、花の香りを載せて優しく頬を撫でていくたびに、水橋風紗は感嘆のため息をついた。

こんな落ち着いた気持ちになるのは、実家の自室にまで香ってきた桜のことを思い出すからかもしれない。今年の夏は実家へ帰省して、郷里の友達と川でバーベキューでもしたいが、スケジュールが合わなくてきつと無理だろう。

都心の一等地に建てられた、高層マンションのエントランス。

そこで立ち止まった風紗は、もう一度桜の香りを楽しむために深呼吸をした。その時、かすかに雨の匂いがして、思わず鼻に皺を寄せる。

もしかして、雨が降るのだろうか？

「雨で花びらが散らなければいいんだけど……」

風紗はもう一度桜に目を向け、それらが凜と佇む光景をしばらく眺めてから、ゆっくりマンションの入り口へと歩き出した。

自動ドアが開いたまさにその瞬間、雷鳴が耳をつんざく。びっくりして後ろを振り返ると、まるで雷鳴とタイミングを合わせたかのように、コンクリートに叩きつける雨が降り始めていた。

「やっぱり。でもまさか、雷もだなんて……」

栄養士として働く風紗の勤務先、会員制高級フィットネスクラブ“アークア”のカフェは、ルームシェアをしているこの高層マンションから数分の場所にある。

仕事を終えて同僚と夕食を共にしたあとここまで歩いてきたが、空を見上げた際には雲ひとつなかった。

「ネオンのせいで星は見えなかったけど……」

その時、ビルとビルの谷間を裂くように稲妻が走り、雷鳴が轟いた。

風紗は悲鳴を上げながら急いでマンションに駆け込み、自動ドアが閉まって音が遮断されたところでホッと息をつく。

「もう、本当になんなの？」

雨が降るのは仕方がないとしても、雷が鳴るほど大気が不安定になっていたことに、妙な不安を覚える。

何か、嫌なことが起きるのだろうか？

この天気、何か不吉なことを暗示しているようで胸が騒ぐ。

「大丈夫、何も……起こったりしないわ」

いつもならこんなことでビクビクしたり、何か起こるのではと気になったりはしない。それなのに、どうして今日は違うのだろうか。

自分でも理由がわからないまま、風紗はセキュリティを通り抜けた。エレベーターに乗り、そこから降りても、ルームシェアをしている部屋の前まで来ても、ずっとそのことばかり考えてしまう。そのせいもあり、風紗は大事なルールを忘れたまま、無意識に玄関のドアを開けた。

「た、た、……っ！」

そこまで言って、風紗は目をまん丸にして息を呑んだ。玄関先で練り広げられている男女の激しいキスシーンに、頭の中が真っ白になる。

目を疑うような、欲望をむき出しにした男女の絡み合いに、風紗の口から悲鳴が漏れそうになった。しかし、あまりの衝撃で、それは喉の奥で詰まってしまふ。

女性はこの部屋の持ち主の矢嶋佳織だが、相手の男性はいったい誰？ もしかして彼女の恋人？

風紗は戸惑いながらも心の中で頭を振り、すぐに考えを改める。玄関のフローリングの上でもつれ合っているなんて尋常ではない。

この男性がどうやって階下のセキュリティを通り抜けたかは知らないが、訪ねてきたセールスマンが豹変して、モデルのように綺麗な佳織を襲っているとしか考えられなかった。

（どうしよう！ 早く何か対処しなければ、佳織さんが犯されてしまう！ 警察に電話をしなければ

ば！でもその前に、佳織さんを助ける方が先？ ああ、早くしないと佳織さんが、佳織さんが……あれ？ 押し倒している？)

風紗は何度もまばたきをして、状況を把握しようと、目の前のふたりを凝視した。佳織が男性を押し倒すような形で馬乗りになり、自分から強引にキスをしている。

つまり、襲われているのは佳織ではなく……男性の方だと解釈しているのだろうか？

声をかけた方がいいのか、それともこのまま何も言わずに回れ右をした方がいいのかわからず、風紗は顔を背けてその場に立ち尽くした。

でも、やっぱりふたりのことが気になって、そっと視線を戻す。

その瞬間、風紗はハッと息を呑んだ。佳織に押し倒されてキスを受けている彼と、目がぼつちり合ったからだ。

少し潤んだような黒い瞳に絡め取られて、思ってもみなかった疼きうずが軀からだの芯を駆け抜けていく。

風紗の心臓は高く飛び跳ね、息さえもままならない。

(何、これ？ ……どうしてこんな風に軀が反応するの？ ……うん、そんなことより、どうして佳織さんのキスを受けながら、冷静にわたしを見ることができるの？)

彼は何故か、風紗の全てを網膜もうまくに焼きつけようとでもするかのように、まばたきすらせずじっと見つめてくる。普通なら、親密な行為をしている時に人が現れたら慌ててもよさそうなのに、彼の瞳には驚愕、困惑、羞恥といった感情は全く浮かんでいなかった。

すらりとした姿勢とその美貌もさることながら、実業家としても成功している佳織に迫られてい

るのに、どうして興奮していないのだろう。

現に佳織の男友達は、そんな彼女から艶うっとりっぽい眼差しを向けられればそれだけで目をギラギラさせ、風紗が傍にいても気にせず佳織を誘惑しようとしていた。なのに目の前の彼は、佳織のキスには何も感じないと言わんばかりに、理性的な瞳を風紗に向けている。

こんな男性……、今まで一度も見ることがない。

綺麗な女性に迫られ、押し倒され、キスをされても、自分を律することができる彼のその態度は、十分に風紗の興味を引いた。

彼と視線が絡まってから数十秒。時間が経つにつれて、心臓はさらにバクバクと鼓動を速める。

その理由が何なのか深く考えないまま、風紗は彼を見つめ続けた。

心なしか体温もわずかに上昇して、頬が火照ほってくるような気がした……まさにその時。

風紗を見つめる彼の瞳に生気が宿り、目尻に笑い皺が寄る。

一変した彼の表情に、風紗は雷に打たれたように軀を震わせた。

ピンと張り詰めていた空気が、一瞬にして崩れていく。それを見計らったように、彼はゴツゴツとした骨ばった大きな手を動かした。

彼の男らしい大人の手を、自然と目が追いかける。

その手が佳織の背中を撫で上げるのを見て、まるで自分の背を撫でられたような錯覚に陥り、風紗は再び無意識に軀を震わせた。

自分でもこんな風になるのはおかしいと思うが、彼が次にどういう動きをするのか、目が釘付け

になっっている。

固唾を呑んで見守る風紗を目を細めて見ながら、その男性は佳織の背を軽く叩いた。

「イヤよ……。こうでもしないと、崇矢さんはあたしのこと、本気にしてくれないんだもの」

キスの合間に気持ちを告げる佳織に対し、彼は面白そうに笑う。

「でもさ、佳織にお客さんだ」

「えっ？」

大儀そうに後ろを振り返った佳織に、風紗は取り繕うような笑いを浮かべた。

「佳織さん、ごめんなさい……」

「……風紗。あなた、押した？」

きちんと「ルール」を守るように、あたしと約束したわよね!? ——そう言わんばかりの不機嫌

な顔と鋭い眼差しに、風紗は素直に頭を下げ謝る。

「本当にごめんなさい」

三歳年上の佳織とは、今年に入つてすぐのころに風紗の勤務先で知り合った。

建設会社の重役である父親の影響を受けて経営学を学んだ佳織は、二十七歳という若さで高級

マンションの部屋を数戸所有し、それを貸し出すことで収入を得ている。そんなこととは露知らず、

風紗は立ち退き要求を受けて引越し先を探しているところだと口を滑らせてしまった。

「じゃ、あたしとルームシェアする? いつもなら自分の生活水準とつり合う人とか付き合わな

いんだけど、風紗のことは気に入ったから、賃料も安くしてあげる。でもね、ひとつだけルールを

守ってほしいの」

彼女が提示した理由……それは、風紗が玄関のドアを開ける前に、必ず「帰宅コール」として玄関のチャイムを鳴らすことだった。

それぐらいの手間はなんでもない。安い賃料で高級マンションに住めるだけでなく、仕事場歩いて通えるというメリットもある。こんなにいい条件はもう望めないだろう。

風紗は佳織の出す条件を呑み、このマンションへ引越してきた。一緒に暮らすようになってまだ三ヶ月ほどだが、佳織とはすれ違いになることも多く、ルームシェアならではの窮屈さを感じたことはない。

ただ難を言うとなれば、佳織のお嬢さま気質に時々振り回されることだろう。

でもそれは覚悟していたことだし、生活水準の違うふたりが一緒に暮らすのだから、仕方がないと割り切っていた。

それにしても、事前に釘を刺されていたあの「ルール」が、こういう場面に遭遇しないためのものであったとしたら、風紗はとんでもない過ちを犯したことになる。

「本当にごめんなさい、佳織さん……」

もう一度謝らずにはいられず、風紗は頭を下げた。

(どうしよう。このまま回れ右をして、ふたりきりにしてあげた方がいいよね? わたしがそうすることを、佳織さんはきくと望んでいると思うし……)

恐る恐る面を上げる風紗の目に、思っていたとおり、怒りの形相を浮かべる佳織の姿が映る。

彼女がさらに気分を害する前に、さっさとここから立ち去ろう。
ふたりきりにしてくれるわよね？ ——そんな佳織の刺すような視線を受けて、凧紗は慌てて踵かかとを返した。

今夜は早朝まで営業しているファミリーストランにでも行って、新作レシピでも考えよう。眠たくなったら、ネットカフェで仮眠でも取ればいい。

慌てて外に向かつて歩き出そうとしたその時、男らしいバリトンの声が耳に届いた。

「……佳織、そんな恐い顔で睨むなよ。せつかくの美人が台無しだろ？ そして、その……佳織の友達も、そんな風に何度も謝ることはないさ」

（あれ？ もしかして結構いい人？ わたしを気遣ってくれてる？）

ゆっくり振り返ると、彼の腰に跨またかったままの佳織が不機嫌そうに唇を尖らせているところだった。そして、彼は肘ひじをつけて少しだけ上半身を起こし凧紗を見る。

「悪いのは、玄関先でいきなり俺を襲ってきた佳織の方だから」

思いもしなかった彼の言葉に、凧紗は何度も目をぼちくりさせた。

「ちよつと、それ、どういう意味よ！ あたしを訪ねてきたのはそっちでしょ？ この家に入ったら、あたしに襲われるのはわかっていたくせに……」

佳織は彼の首を絞めるようにネクタイを掴んで自分の方へ引っ張るが、すぐに手を離し、彼のシャツの上に手を広げた。そして、ゆつたりとした仕草でその広い胸に手を這はわせる。

誘うように触れられたからか、彼は凧紗から佳織へ視線を移したが、彼女の動きを止めようとは

しない。

「ああ、わかっていた。だからずっとこのマンションには近づかなかったんだ。そのことは、お前自身よくわかっていたはずだが？ だから、どうしても相談したいことがある」と俺に懇願してきただんだけだろ？」

人当たりのいい雰囲気をもったまま、彼は駄々をこねる子どもをあやすように、優しい笑みを佳織に向ける。そんな風に見られて居たたまれなくなったのか、佳織は軽く俯き小さく息をついた。「やっぱり一筋縄じゃいかないのね……」

そんなやりとりを見ていたものの、凧紗にはふたりがいったいどういう関係なのかさっぱりわからなかった。

でも、ひとつだけわかる。佳織は、自分から押し倒してしまいうぐらいに、彼のことが好きだったことが……

ただ、腑に落ちない。

佳織には男友達がたくさんいて、その中のひとりとは男女の関係がある。彼とキスをしながら部屋に入ってそのまま引き籠こもることがたびたびあったし、親密な行為をしている声を耳にしたこともあった。だから、佳織はその男性のことが好きで、彼と付き合っているとずっと思っていた。

この光景を見るまでは……

本当にふたりはどういう関係なのだろう？

佳織から彼へと目を移した時、いつの間にか凧紗に目を向けていた彼と視線がぶつかった。彼は

佳織の赤い口紅を唇にべったりつけたまま、顔色を変えずに優しそうな笑みを浮かべている。だが、そんな彼がいきなり豹変した。

突然面白そうに口角を上げて、ニヤニヤと笑い出す。しかも、佳織に見られているかもしれないのに、まるでこの状況を楽しんでいるような大胆不敵な表情だった。

前言撤回！

佳織がまだ彼の腰に跨またかっているのに、唇にキスの痕跡を残したまま風紗に笑みを向け、さらにこの危険な状況をあえて楽しむような男性とくれば、プレイボーイかナンパ野郎に違いない。

彼への好感度が一気に下がった瞬間だった。

(あなたの眼差しにドキツとしたり、いい人かも……って思ったりしたわたしの心を返してよ！)

こういう男性は、風紗の好みのタイプではない。こんな女つたらしのどがいいのか、佳織の好みが全くわからない。

「……崇矢がそう言うのなら、許してあげる。でも、風紗。これであたしが言ってた意味、わかったわよね？」

我知らず唇を強く引き結び、ずっと彼を睨むように見つめていた風紗は、慌てて佳織に目を戻して素直に頷いた。

「それならいいわ」

彼に跨っていた佳織がゆっくり立ち上がると、それに続いて彼も立ち上がった。服についた埃ほこりを手で軽く払った彼は、ポケットからハンカチを取り出し、佳織の真つ赤な口紅がついた唇を拭う。

これが嫌なんだろう？ —— 問いかけるように、でも目元には笑いを浮かべながら、彼は風紗を見つめる。頬が熱くなるのを感じて、風紗はすぐにそっぽを向いた。

どうして挑発するような眼差しを向けてくるのかわからないが、そうされるたびに胸が騒ぐ。(もう、いい加減にしないさい。わたしは彼に幻滅したんでしょ?)

イライラしそうななるのを押しとどめるために、風紗は彼のことを頭の中から放り出し、窺うように佳織に目を向けた。まだ風紗のことを怒っているだろうと思っただが、彼女は彼や風紗からも興味を失ったかのように、奥のリビングルームへさっさと歩き出していた。

ここにおいても、親密な行為を進めることは無理だと悟ったのだろう。彼女は熱しやすく冷めやすいところがあつて、気分を削そがれると早々に次の行動に移るタイプだった。

(わたしのせい、よね……やっぱり)

風紗はまた心の中で佳織に謝りながら、力なくため息をついた。その時、廊下の先でいきなり彼女が振り返る。

「風紗もこっちへ来て、三人で一緒にお酒でも飲みましょ。でもその前に、あたしたちのために適当な肴さかなを作つて」

思つたとおり、佳織はもう次のことに頭を切り替えている。

「うん、わかつたわ」

過ぎたことでいつまでも悩まず、すぐに次の行動へ移る佳織の姿を見るたび、風紗は彼女に強く惹かれ、いつしか憧れに似た思いを抱いだいていた。

彼女のようにになりたい……

「ふうくん、そんな風に優しい表情もするんだ……」

耳元で彼の声が聞こえた瞬間、風紗の軀が飛び跳ねた。さらに温かい吐息で耳朶をくすぐられ、たまらず身をよじって振り返る。

彼の存在をすっかり忘れていた上に、無防備に笑みを零してしまったなんて自分が信じられない。でもここは慎重に、礼儀正しく振る舞っておくのがベストだろう。

風紗は、無理やり作り笑いを浮かべた。もちろん、佳織の口紅が綺麗に拭い取られているのを確認することも忘れない。

そんな風紗に、彼は何かを考えるような目を向けて腕を組む。

「俺たちの出会い方は……まあ、いいとは言えないな。でもさ、こういう変わったシチュエーションの方がお互い印象に残る。数ヶ月後には、俺も君もあれこそが運命の出会いだった”って思うようになるかもな」

「それは絶対にないですから」

(佳織さんの好きな人なのに、運命の出会いかも……なんて、わたしが思うはずない)

作り笑いを崩さないように気をつけて、風紗は彼の言葉をばつさり切り捨てた。

何度もこめかみが脈打つのは、無理に笑顔を作っているからだろう。相手はこういう人だけど、佳織の好きな人を邪険に扱うことはできない。

愛想笑いをする風紗に、彼は興味深そうな目で手を差し出してきた。

「あの佳織に、こんなに楽しい友達がいたとはな。俺は……」

彼の言う “こんなに” という部分に引っかけかりを覚えたが、そこを追及してしまうと、会話を続けることになる。それだけは避けたかった。

それに、握手を求めるかのように差し出された手も気になる。

どうしようかと思っていると、部屋の奥から佳織の足を踏み鳴らす音が聞こえてきた。

「ちよつとふたりとも、いったい玄関先で何をしているの!? 早くこつちに来てよ! 風紗、さつさと看を作つて!」

佳織の怒鳴り声に、風紗の軀はビクッと飛び跳ねた。

「……は、はい、今行きます!」

佳織の怒号に、慌てて大声で返事をする。それから、差し出された彼の手に一度視線を落とし、再び彼を仰ぎ見た。

「佳織さんがわたしを呼んでるので」

彼女の名を特に強調して、“あなたと握手をするつもりはありません” とはつきり示し、彼をその場に残して歩き出した。するとキッチンへ向かう風紗の後ろから、いきなり忍び笑いが聞こえてきた。

「ヤバッ……。あんた面白いわ。俺の中で……お気に入りの子に昇格!」

(お気に入り? わたしが昇格!? どこをどうしたら、そんな言葉が出てくるの?)

絶対に振り返らない、どんな表情を浮かべているかなんて知りたくない。

何度も強く自分に言い聞かせていたのに、キッチンに入ろうとした時、好奇心に負けてしまい、風紗の目は自然と玄関へ向いた。彼はずっと風紗の後ろ姿を目で追っていたのか、ふたりの視線は簡単に絡まり合う。

その瞬間、彼は風紗にニヤツといやらしい笑みを投げつけた。

きつとお前は、俺のことが好きになるよ——そんな目つきに、風紗は唇を強く引き結び、フンツとそっぽを向いた。

キッチンに入った途端、彼の楽しそうな高笑いがかえってくる。

「もう、なんなのよ、彼は！……本当にイヤ！」

叫びたいのを堪えながら呟くと、リビングルームにいたはずの佳織がいきなりアイランドテーブル越しに声をかけてきた。

「風紗……、言っておくけど崇矢はあたしが目をつけているんだから、絶対に横から奪わないで。いいわね！」

念を押すように佳織から人さし指を突きつけられ、風紗はびつくりして軀を後ろに反らした。

「……あの、どうしてそう思うの？」

「どうしてか……ですって？」

何故訊き返されるのかわからないと言いたげに、佳織は目を見張った。

「そんなの決まってるでしょ！ 彼はどんな女性をも虜にするからよ。でも……誰に対しても絶対に興味は持たない。性欲がないわけなのに、あたしに押し倒されてキスされても、彼の股間をお

尻で擦っても……勃起すらしなかった」

「か、佳織さんっ！」

彼女のあからさまな話し方に慌てて後ろを振り返るが、話題の人物はまだ姿を見せない。ホッと佳織に目を戻すと、じつと風紗を見つめていた彼女の強い眼差しとぶつかる。

「いい？ 風紗の気持ち……彼に傾くのは別にかまわないけど、絶対にあたしから奪わないで。……まあ、相手があの調子だから、風紗なんかには彼の心を奪えるとは思ってないけどね」

フツと鼻で笑うと、佳織は風紗に背を向けて広々としたリビングルームへ戻った。ソファに座る彼女の姿を見てから、風紗は小さく頭を振る。

「わたしが、彼を奪う？……そんなの、絶対に有り得ないのに」

風紗は佳織のどんなでもない発想に呆れながら、冷蔵庫の扉を開けて食材の山から今日の料理に使うものを選ぶ。そんな風紗の頭の中には、何故か彼の高笑いがかいつまでも響いていた。

* * *

「初めまして。俺は藍沢崇矢、二十九歳。野瀬コーポレーションのデザイン室でインテリアデザイナーとして働いてる」

「……水橋風紗、二十四歳です。フィットネスクラブ“アクア”のカフェで、栄養士として働いています」

「ふう〜ん、ブアクア……ね」

佳織の前で型どおりの自己紹介をしているのに、崇矢のその独り言の言い方が妙に神経に障る。もちろん、彼の本意がどうなのかはわからない。

でも、暗に、ああ、一般人は入会できないように会費をつり上げ、金持ちしか会員にしない……あのフィットネスクラブか。そんなところで働いてるんだと侮辱されたように思えてならなかった。フィットネスクラブ「ブアクア」は、いろいろな社会事業に力を入れている。だから卑屈になる必要なんてないのに、そう感じてしまうのは崇矢の印象のせいだろう。

人当たりのいい顔を見せていたかと思ったら、一転して不敵な顔つきになる。そのせいか、彼が独り言を言っただけでも、何か裏があるのではと勘ぐってしまう。

崇矢さんは危険な男だわ——そう思わせる何かがあるにはあり、不安が凧の頭の中で渦巻く。だから、崇矢の口から出る言葉ひとつひとつに反発したくなる。

ここまで過剰に反応することはないのに……

（わたし、絶対にどこかおかしい。佳織さんから釘を刺されたせいで、余計に彼を意識してる？）

佳織の手前もあって、凧は興味などないかのようにもらった名刺をテーブルの端に置いた。

自己紹介の次は、佳織と崇矢の関係がどういふものかをどちらかが話してくれると思ったが、ふたりともそのことにはあえて触れようとしない。

（わたしは別に……崇矢さんのことが知りたいってわけじゃないけど、ふたりの関係を話してくれなかつたら、かえって気になる……）

でも、これは危険かもしれない。崇矢のことなんて気にしたくないのに、少しでも考えてしまうと、頭の中が彼一色に染まってしまいそうだった。

もしその勢いに呑み込まれて、彼への思いが反転してしまつたら……と思うと、凧は恐怖を覚える。

それだけは、やめておこう。好きと嫌いは、表裏一体なのだから……

突然浮かんだ“好き”という単語に身震いを覚え、凧はワイングラスを持ち、スパークリングワインを一口飲んだ。

そのあと二口三口と飲んで一息ついてから、窺うようにふたりに目を向けた。ふたりは特に話もせず、佳織はオーディオコンポから流れる洋楽を聴きながらグラスを傾け、崇矢は何を考えているのかわからない顔で焼酎のお湯割りを作っている。

話のきつかけすら作ってくれないので、凧も話しかけるのははばかられた。

（ああ、早く自室に戻りたい……。佳織さんもそれを望んでいるよね？）

今日の佳織の態度は、本当に読みづらい。部屋から早く立ち去ってほしい時、彼女は必ず目配せをしてくる。それを受けたら、凧は自室に戻るか、もしくはふたりの邪魔をしないように外へ出ることになっていた。

でも今回はそんな素振りすら見せず、佳織は自分だけの世界に入っている。どうしようと思いはながら、凧はテーブルに並べられた食器に目を移した。

今は三人分のグラスと取り皿が並んでいるけど、凧がキッチンで料理を始めた時、リビングル

ームのテーブルにはそれらは二人分しかなかった。崇矢をもてなすために、佳織が前もって準備していたということだろう。

そんな彼女のためにも、早くこの場から立ち去らなければという思いが込み上げてくる。

とりあえず、二杯ほどお酒を飲んだら席を立つてもいいだろうか？

失礼にならない程度の時間をふたりと一緒に過ごしたあと、そろそろ断りを入れようと思った風紗は、佳織に目を向けた。

彼女は、今もお酒を飲み続けている。ワイン、ビールを飲んでいるのは目にしていたが、いつの間にか焼酎、さらにブランデーとグラスを空けていた。

佳織はお酒が好きで、外で飲んで帰ってきてワインなら軽く一本は空けてしまう。それほどアルコールに強かった。

だから、量についてはそれほど心配していない。気になるのは、そのスピードだった。ただ単にお酒が飲みたいのか、それとも崇矢の誘惑に失敗して荒れているのかわからないが、こんな無茶な飲み方をしていたら、急性アルコール中毒になりかねない。

でも、それを止める術は風紗にはなかった。

あれは、ルームシェアを始めてすぐのころ。一度暴飲する佳織を止めようとして、平手で叩かれたことがある。

彼女は、あたしたちは何でも話せる親しい友達じゃないのよ。ただ上手く調子を合わせて付き合える者同士がルームシェアをしているだけなの！ いいこと、家主のあたしに命令なんて絶対にし

ないで！”とわめき散らした。彼女が酔っていたせいもあるけど、もう二度と肉体的にも精神的にも……あんな辛い思いはしたくない。

(こうなったら、もう崇矢さんに助けを求めるしか……)

懇願を目に浮かべて崇矢へ顔を向けたのに、彼は佳織の醜態には目もくれず、ブランデーの芳醇な香りを楽しんで、風紗の作った肴に手を伸ばしていた。

目の前でお酒に溺れている佳織のことを、どうして気にしてくれないのだろうか？

恋人同士でないことは、佳織の牽制を受けてわかつてはいるけど、彼の気持ちはどこにあるのかさっぱりわからない。

佳織に押し倒されても嫌がらず、キスをされてもされるがままになっていたから、なんらかの感情はあるはずなのに、彼は佳織に手を差し伸べようとはしなかった。

「これ、味いな」

風紗の視線を感じたのか、崇矢がいきなり話しかけてきて、お皿のひとつを指す。

それは春巻きの皮でチーズを包み、オイルスプレーを使ってオーブンで焼いたものだった。一緒に添えたバジルソースをつけて食べるとさらにお酒が進むので、今日も佳織のために作ったが、初めて食べる彼からも褒められると、栄養士としてやっぱり嬉しい。

「ありがとうございます」

彼の言葉を素直に受け取り、風紗は顔を綻ばせた。

「今度さ、俺のためだけにこれを作つてよ。……俺の家でさ」

はいいい!

屈託のない笑顔を向けてくる崇矢の前で、風紗の笑みが強張る。

(佳織さんの前なのに、どうしてわたしにそんなことが言えるの?)

風紗は慌てて佳織に向き直り、彼の家に行く気はないことをはっきり伝えようとした。

でも彼女は、崇矢の言葉を聞いていなかったのか何の反応も見せず、まだお酒を飲み続けている。

「か、佳織さん?」

恐る恐る訊ねると、佳織は焦点が合わない瞳を風紗に向けた。鼻につくアルコール臭から、彼女がかなりの量を飲んだのがわかる。完全に酔っ払っていないことは、ここ数ヶ月の付き合いからわかるものの、それでもやっぱり飲むのはもうやめた方がいい。

今は大丈夫でも、相当の酒をチャンポンしているから、きつと悪酔いしてしまう。

風紗は彼女が腕に抱え込んでいる焼酎の一升瓶に目を向けてから、こちらに渡してと懇願するように片手を差し出す。もちろん、佳織からいきなり叩かれないよう、すぐに顔を庇う気構えも忘れない。

「あの、佳織さん大丈夫? もうやめておいた方が……」

「うん……? ……あつ!!」

佳織の大きな声にびつくりして、風紗は思わず両手で顔を覆いながら身を縮めた。

「ほら、風紗も……もっと飲みなさいよ!」

風紗の予想に反して、彼女はいきなり一升瓶を持ち上げた。風紗のグラスにそれを乱暴に注ぐ。

「あつ、佳織さん! まだ入ってるから……!」

すぐに一升瓶を取り上げようとして手を伸ばしたが、一足遅かった。一升瓶を勢いよく傾けたために、焼酎はグラスから溢れ出してテーブルを濡らしていく。

「佳織!」

崇矢が身を乗り出し、彼女の手から一升瓶を取り上げる。

「お前、酔っ払ってるのか? ……もう寝ろ」

「うん、……そうだね。今日は飲みすぎちゃったかも。……お風呂に入ってこようかな」

もし風紗があれだけの量を飲んでいたら、足元がおぼつかなくて、絶対にひとりでは立ち上がる事ができない。

そう思い風紗は佳織を支えようと手を差し出しながら一緒に立つが、彼女はその手を乱暴に振り払った。

「……っあ!」

ネイルサロンで綺麗に整えられた佳織の爪が、風紗の手の甲を掠る。火傷した時のような痛みが走って咄嗟にそこを押さえるが、赤くなっただけで血は出ていない。

ホッと息をついた途端、苛立ちも露に佳織が地団駄を踏んだ。

「あたしは酔ってなんかない! ただ、いつもよりちょっと飲みすぎただけよ!」

佳織の言うとおり、彼女はふらつくこともなく、しっかりと自分の足で立っている。

「そうだな、ちょっと飲みすぎたかもな。だったら、風呂はやめておけ」

佳織の痲癩を宥めようとしているのか、崇矢は立ち上がってぶんぶん振り回される彼女の手をしっかりと掴む。

「あたしもバカじゃない。お酒を飲んだ時は、お風呂に入ったりしないわ。……手と足、そして女性の大事なところを洗うだけ。ねえ、崇矢さんも……手伝ってよ」

風紗は、佳織の艶っぽい声、意味深な言葉に意表をつかれた。

でも佳織は風紗のことなんて気にせず崇矢にしなだれかかり、例の視線……ふたりきりにしてというメッセージを投げってきた。

風紗は慌ててふたりに背を向け、縮こまるように俯く。

（今になってあの目？ もしかして……佳織さんはこれを狙って、酔っ払ったふりをしていた!?）

佳織が崇矢を手に入れたいと強く望んでいることはわかっていたのに、実際こうやって誘惑するタイミングを密かに窺っていたとは気付きもしなかった。

（佳織さん、本気で崇矢さんのことが好きなんだ……）

彼女の気持ち伝わってきた途端、風紗の胸がざわざわと騒ぎ始める。

「……わかった。手伝ってやる。ほら、行くぞ」

崇矢が、佳織の誘惑に応じた！

胸に針で刺されたような痛みが走り、風紗の顔から一気に血の気が引いていく。

佳織の媚を含むクスクスという笑い声がどんどん小さくなり、バスルームのドアを開ける音が遠くから聞こえると、風紗はいつの間にか詰めていた息をそっと吐き出し、その場でうな垂れた。

「どうして、こんなにもショックを受けているの？ 佳織さんが男の人と消えるのは、日常茶飯事のことじゃない。何を今更……」

頭の中に渦巻くふたりの姿を追い払うように、風紗は唇を引き結び、拳を強く握りしめた。

「痛っ！」

手を上げて、そこに感じた痛みを確認する。佳織の爪で傷つけられたところに、薄く血が走っていた。拳を作ったことで皮膚が引つ張られ、運悪く裂けてしまったのだろう。

「……洗っておかきや。でも洗面所は今ふたりが……」

風紗は仕方なくキッチンに入り、シンクで血を洗い流す。水が冷たくて、指の先がかじかんできたが、しばらくそのまま耐えた。

水道を止めて、濡れた手をタオルで拭ってから傷口を見る。血はそれほど滲んでいない。あとは消毒でもしておけばすぐに治るだろう。

風紗は再びリビングルームに戻り、救急セットが入っているバッグを手にした。消毒を終え、部屋へ戻る前にもう一度傷口を見ると、既に血は止まっている。

「うん、もう大丈夫」

「何が？」

突然響いた崇矢の声に、風紗は飛び上がるほど驚いた。すぐに振り返ると、彼がドアを塞ぐようにして立っている。

「ど、どうしてここに!? ……佳織さんと、一緒に」

「佳織？ 手足を洗ったあと、今は洗面所で髪を洗ってる」

つまり、佳織はしばらく戻ってこないということ。髪を洗い終えたあと、トリートメントをして乾かす時間を考えたら、十五分は籠こももっていると考えられる。

その間、彼とふたりきり。

薄暗い室内を照らすムードたつぷりな間接照明、大きな窓から望む光り輝く夜景に意識を向けた途端、風紗は緊張から軀からだを強張らせた。

本当なら、このリビングルームで崇矢とふたりきりの時間を過ごすのは佳織の方だった。なのに、今彼といるのは、風紗になっている。

「……風紗のことで、少し訊ききたいことがあったんだ。佳織抜きの場合」

いきなり呼び捨てにされたことに、文句のひとつも言いたかった。

崇矢の思わせぶりな言葉に、軀からだの芯こゝろに疼うずきが走ってさえないなければ……

風紗は、口腔に溜ためまっていく唾つばを、ゴクツと呑む。

緊張している風紗に対して、崇矢は面白そうな表情を浮かべてこちらを眺めている。

ほんの数時間前に出会ってから彼はずっとこんな調子で、それがまた風紗の居心地を悪くさせていた。

「風紗？」

再び名前を呼ばれた時、崇矢が少し動いたせいで彼の顔に陰影ができた。そのにこやかな表情の裏に隠れている黒い部分が見えたような気がして、軀からだが自然と震える。

どうしてそう思うのかわからない。

でもそれを表に出さないうために、崇矢は表情を作っている……そんな気がしてならなかった。

いつの間にかその秘密を突き止めようと彼を見つめていた自分に気付き、風紗は慌あわてて視線を逸よらす。

（もしかして、彼のことを知りたいって思った？ まさか、ね……）

自嘲気味に笑いながら、風紗は小さく頭を振る。

崇矢とふたりきりになったりするから、余計なことを考えたり、彼と佳織が消えただけで心臓に痛みが走ったりするのだろう。

それならば心の安定を取り戻すため、さっさとここから立ち去ればいい。

「じゃ、佳織さんのこと……あとはよろしくお願いします。わたしはこれで失礼します」

逃げるのは今しかないと彼に背を向け、置きっ放しにしていた春物のジャケットを手を持つ。

「じゃ、ごゆっくり……」

形ばかり頭を下げると、風紗は崇矢の傍らを通り抜けて廊下へ出た。

追いかけられるかも……と不安を覚えたけど、それは取り越し苦労だった。自室のドアの取っ手を掴んでも呼び止められることなく、簡単に部屋に入ることができた。

嗅かぎ慣れたアロマの香りに包まれて、風紗はホッとため息をついた。

母が作ってくれたパッチワークのベッドカバー、温もりを感じさせてくれるウッドチェスト、そして小さいころから大事にしているぬいぐるみを目にして、強張っていた軀からだからゆっくり力を抜く。

それらは全て実家で使っていて、就職した時に持ち出したものだった。懐かしい家具に囲まれていると田舎を思い出し、心が落ち着いてくる。

佳織からは「そんな古臭くて汚い家具を、この家に入れないで。新しいブランド家具ぐらい買いなさいよ。お金がないの? ……ったく、こんなにあたしと生活水準が違うなんて」ときつい言葉を投げつけられたが、自分のスペースはどうしても守りたくて、彼女を説き伏せ、汚さないことを条件に置くことを許してもらった。

今ほど、そうして良かったと思つたことはない。今日はいつもより、心も軀からだも疲れているように感じたからだ。

風紗は深呼吸をしてからチェストの傍にバッグを置き、ジャケットをハンガーにかけた。それから部屋の空調に手を伸ばし、つまみを調節していると、いきなりドアをノックする音が響いた。

突然のことに風紗の軀がビクッと飛び跳ね、心臓に痛みが走った。

「だ、誰!？」

本能で誰が来たのかわかっているのに、風紗はそう口にしていた。静かにドアのレバーが下がり、ゆっくりドアが開く。隙間から顔を覗かせた崇矢は、風紗の顔を認めるとすぐに室内へ入ってきた。初めて視線を交わした時のように、彼の黒い瞳は少し潤んで見えた。そこに男の色香が感じられて、クラクラと眩暈めまいがしそうになる。それでも、彼を眺めずにはいられなかった。

モデルのような長身、引き締まった体軀、喉仏が目立つ太い首、柔らかな唇、そしてはつきりとした目鼻立ち。彼を一目見ただけで、誰もが振り返ってしまうに違いない。

(やめて、そんな風に真正面からわたしを見ないで……)

どのくらい見詰め合っていたのだろう。

実際は十数秒かもしれないが、風紗にはそれが数分にも感じられた。頬の筋肉が緊張で引きつりそうになる。

もうダメ! —— 張り詰めた神経が切れそうになった時、急に崇矢が口元を緩める。

「ふうくん、こういう部屋で暮らしているんだ。意外と綺麗にしてるんだな」

崇矢のその一言に、風紗はムツとした。部屋に入ってもいいと言っていないのに、追い出されるとも思っていないこの凶々しさは、いったいどこから来るのだろう。

興味津々といった様子で部屋を見回す彼に、足蹴りを食らわせたい衝動に駆られる。こんなことをするから、彼に反感を持ってしまうのかもしれない。

「あの一!」

「うん? 何?」

振り返った崇矢は、女性を蕩うたがけさせるような爽やかな笑顔を向けてきた。

風紗は軽く唇を引き結び、その顔に気持ちを揺り動かされないう意識して、しっかりと顎あごを上げる。

「……こうやって、勝手にわたしの部屋に入ってくるのはどうかかと思っただけ」

「どうして? ……あつ、もしかして佳織のことを気にしてる? それなら大丈夫。さつきも言ったとおり、まだ出てきそうにないから」

「そういう意味じゃなくて……」

「あのさ、佳織が他人と一緒に暮らしてると知って、ちょっとびつくりしたんだが、あいつと暮らすことに不便はない？」

「えっ？」

ここまで乗り込んできた彼の口からそんな言葉が出たことに面食らい、凧紗は口をポカンと開けた。

「何？ 俺がこんな話をするとは思わなかった？」

ニヤツと笑い、面白そうにこちらを見つめる崇矢。

その途端、凧紗はすぐに開いた口を閉じて彼を睨みつけた。

「そういう言い方、……嫌いです」

凧紗の答えに、崇矢がいきなり肩を揺らしながら含み笑いをする。

「俺……凧紗のそういう言い方、好き」

この人はどうして臆面もなく、そういう言葉が言えるのだろう。

呆れて物が言えず、凧紗は肩を落としてただ小さく頭を振った。

「……それはまた次の機会にでも話すとして。実はちよつと気になつてさ。凧紗は佳織と一緒に自分偽らずに暮らせるのか？ あいつはお嬢さまだから、いろいろと言いなりになってるんじゃないか？」

「えっ？」

何故崇矢がそんなことを言ってくるのかわからず、凧紗は当惑を隠せないまま目を細めた。

「今日、ずっと見てた。ふたりのことを……。この家の持ち主は佳織だとしても、家賃を払っている以上、凧紗は居候じゃない。だが、凧紗は佳織から家政婦みたいにこき使われている。それに対して、お前は一度も反論しようとしな」

「それは！」

「それは？」

無理にでも聞き出すぞ——と目を光らせる崇矢を睨み、凧紗は口を噤んだ。

彼の言うとおり、確かに佳織の機嫌を損ねないようにしている。彼女は、凧紗には想像できないようなお嬢さまだから、田舎暮らしの自分とはどうしても相容れない部分が出てくる。そのことは、初めからわかっていた。

だから彼女の機嫌を損ねるぐらいなら、この生活に波風を立てるぐらいなら、いつそのこと自分が我慢すればいい。そう思つて、凧紗は佳織と接してきた。

でも、そのことを誰にも言うつもりはない。これは凧紗自身が決めたことで、それで佳織との関係も上手く成り立っているのだから。

凧紗の思いが崇矢にも少しは伝わったのだろう。

彼は腕を組み、少し俯くようにしながら目を閉じる。

「なるほどね。こうやって突いても凧紗はそう簡単に俺にはなびかない……か。すごい新鮮な気分だ。こういう感覚、久しぶりだな」

崇矢は呟いているだけなのに、凧紗は何故か不安を煽られて身震いしそうになり、思わず我が身

を強く抱きしめる。

その衣擦れの音に崇矢がゆっくり目を開けた。彼の視線は風紗の胸元の辺りで止まり、何故かそこを見ながら眉間に皺を寄せる。

軀からだに両腕を回すことで、きつと乳房が強調されているのだろう。

それにしても崇矢の顔つきが気になったが、堂々と胸元に目を向けられているのに耐えられず、すぐに両手を軀の脇に下ろした。

彼は少しの間考え込むようにじっとしていたが、ゆっくり面を上げて、風紗を凝視する。

「じゃ確認だけ。風紗は……どうして佳織から暴力を受けても耐えられるんだ？」

「わたしが佳織さんから？ そんな……暴力なんて受けてません」

どうしてそう言われるのかわからないが、佳織の名譽を守るためにも、風紗は必死に目で訴えた。

「俺は専門家じゃない。だが、見ていればわかることはある。酒を飲んでいる時、佳織が手を上げるんじゃないかとビクビクしていただろ？ それは、以前……佳織が風紗を傷つけたことがあ
る……ということだ。どうしてそれを隠す？」

「あれは！ その、暴力とかそういうものじゃ……」

ちよつとした仕草だったはずなのに、見抜かれていたとは思わなかった。

風紗は恥ずかしくて、目を泳がせながらしどろもどろに答えたが、そこであることに気付く。

(どうして、わたしばかりに心の中のことを白状させようとするの？)

何も言わずにいたのは、風紗だけではない。崇矢も自分のことを何も話していないのに、何故こ

んな風に詰め寄られなければならないのだろう。

「わたしは、崇矢さんほど自分を隠してなんかいませんん！」

風紗は自分が口走った言葉に目を見張り、ハッと息を呑んだ。

そんなことを口に出すつもりなんて全然なかった。

玄関で目を合わせたあの瞬間からずっと彼にやられっぱなしだったので、反発したい気持ちがあったのは事実。

でも、そう思っていたとしても、それを初めて会った彼に話さなければならぬ理由なんてない。だから、はつきりと口に出して突っかかるつもりはなかった。

そんな風紗に、一瞬崇矢もびつくりしたような表情を浮かべるが、すぐに破顔して、お腹を抱えて大声で笑い出した。

「……本当、風紗は可愛いな。俺の予想とは違った行動ばかり起こすなんて、本当に退屈しない。俺、マジで……お前のこと気に入った」

何がそんなにおかしいのか全くわからない。

崇矢は、目尻から零れそうになる涙を指で拭いながらも、まだお腹を抱えて笑い続けている。そんな彼を、風紗は呆気にとられたまま静かに眺めた。

(今言ったことは冗談？ それとも本当に今……わたしに本気になったということ？)

しばらくすると、崇矢は愉快そうに笑っていた表情を一変させ、意地悪っぽい笑みを浮かべた。

獲物を見つけた肉食動物のような目で、彼はゆつたりとした仕草で風紗に近づいてくる。

彼の軀がだんだん大きくなって、風紗に覆いかぶさってくるような錯覚に陥り、思わず逃げるように少しづつ後退した。

「あっ……」

背中当たった硬い感触から、いつの間にか壁際まで追い詰められていたことに気付き、彼にも聞こえてしまうぐらいはつきりと息を呑む。

(な、な、何!? ちょっと……わたしに近づかないで)

お互いの体温が感じられるぐらいにまで、距離が縮まる。崇矢の黒い瞳が、風紗の目を食い入るように見つめたあと、鼻、震える唇、そしてブラウスを押し上げる胸の膨らみへその視線を落とした。彼はそこに顔を埋めたいと言わんばかりに、目を凝らしている。

心臓はドキドキと高鳴り、頭がポーツとなるほどの熱にくすぐられて、風紗は悩ましがな吐息を漏らしそうになる。

「俺のことが、怖い?」

胸から視線を外して、風紗の瞳を覗き込む崇矢。

「そんなこと、あるわけない……っ!」

否定する風紗を戒めたいのか、崇矢は精神的な圧力をかけるように壁に両手をついた。彼の両腕に軀を挟まれただけで身動きできなくなるのに、彼はさらに軀を押しつけてくる。

衣服越しに崇矢の体温を感じて、風紗の軀の奥深いところに甘い衝撃が走った。

その震えは、きつと彼にも伝わっただろう。悟られたくない一心で、風紗は両手で彼を突っぱね

ようとした。

でも彼は、その手首を強く掴んでおもむろに引つ張り上げた。

「……手の甲とはいえ、傷つけられても黙っているなんてな」

佳織の爪で傷つけられたそこは、擦れて赤くなっているものの、血はもう凝固している。それなのに、崇矢は食い入るようにその傷を見つめていた。

風紗が怪我をしたと、いつの間にか気付いたのだろう。崇矢に手を見せるようなことは一度もしていないのに……

不意に先ほど眉間に皺を寄せた彼の顔を思い出し、風紗はハッとした。

もしかして、軀に両腕を回した時に彼が見ていたのは、風紗の胸ではなく手の甲だった?

見られていないのをいいことに、まじまじと彼の顔を凝視していると、彼がいきなり目だけを動かした。

間近で視線が絡まった瞬間、崇矢は唇の端を軽く上げ、あろうことか……傷口には触れないようにして、手の甲にキスを落とした。

突然のことに息を呑み、風紗は目をまん丸にした。温かい彼の唇の感触に、頬がだんだん燃えるように熱くなってくる。

(嘘、何これ? ……どうしてわたしにこんなことを!)

慌てて手を振り払って、彼の拘束から逃れる。彼の温もりが残ってジンジンとする手の甲を、隠すようにもう片方の手で覆った。

「こういうことは、わたしにじゃなくて……佳織さんにすればいいでしょ！　お願いだから、わたしを巻き込まないで」

小さく頭を振る風紗に、またも彼が近づく。それを押しとどめるように、再び両腕を突っぱねて彼の胸を押し返すがビクともしない。

どんなにあがいても、彼から逃げ出せない！

でも、本気で彼から逃げたかつたら、彼の股間に膝蹴りをしてでも逃げようとするだろう。そうしないのは、風紗自身がそれを……望んではいけないからだろうか。

（わたしはいつだってどうしたいの？　このまま流されたらダメなのに……）

手のひらから伝わる、彼の燃えるような熱と激しい鼓動。それに合わせて風紗の胸もさらに早鐘を打ち始める。

「佳織、ね。……もしかして風紗は、俺と佳織が付き合ってると思ってる？　……残念！」

面白そうに笑みを浮かべたかと思ったら、崇矢はその手を伸ばして風紗の頬を指の腹で撫でた。触れるか触れないかのタッチに、どう対応していいのかわからない。

「佳織はさ、お金持ちでお嬢さま。さらに、大抵の男を振り向かせられる美人ときてる。だがあいつは、俺のことをアクセサリーとしか思っていない。そんな彼女に、俺は全く興味が湧かない。どちらかと言えば……」

崇矢は風紗の頬から下唇の膨らみへ指を走らせ、どんな女性をも魅きつけるような流し目を向けてきた。

「どんなことがあってもそれに耐える根性と、自分の意志もきちんと持つ、凛とした女にこそそれれる。必死に抵抗をして俺との距離を置こうとする……風紗みたいな女にね」

崇矢の言葉に息を呑み、風紗は目を見張った。

その反応は予想済みだ——と告げるように、崇矢は妖しく目を光らせていたずらっぽく笑う。

風紗の心を掻き立てるその表情に、またも腹が立つ。

「じゃ、どうして佳織さんの家に来てるのよ！」

考えをまとめる間もなく、風紗の口から言葉が迸った。

「それはもちろん、顧客は大事にしないと駄目だから」

言いよどむことなくあつさりと口にする崇矢に、風紗は面食らった。

「俺の仕事を気に入ってくれた佳織は、家を買った時に俺を名指しして、仕事を依頼してくれるってわけさ。今日もそのことで呼ばれたんだ。我が社の上得意だからね、彼女」

「上得意？」

「そう、上得意さま。俺たちは……そう、ただそれだけの関係さ」

ふたりの関係がどういうものなのか、やっと風紗にもわかってきた。

「じゃ、佳織さんを気にかけてあげて。わたしは崇矢さんの顧客でもなんでもないんだから、こんな風に愛想を振りまく必要なんてない」

（それがわたしの本音なの？　それならどうして……わたしはいつまでも彼に触られたままになっているの？）

憎まれ口を叩きながらも、崇矢の傍から離れられない自分自身に困惑を覚えた時、何故か突然昔の記憶が甦った。風紗が栄養士を目指すきっかけを与えてくれた、パティシエの元カレのことを。当時と今では全く状況は違うが、口げんかをした際、年上だった元カレもこうして風紗をあやすように肌に触れていた。そして、優しく抱きしめられると、もう何も言えなくて……

「……俺を目の前にして、どこに意識を飛ばしている？」

「えっ？」

面を上げた風紗に、崇矢は互いの顔が触れそうなほど顔を近づけてくる。

「知ってた？ そうされると男って、狩りの本能”を刺激されるんだよな”

そう言うなり、崇矢の表情がなくなる。口元からは力が抜け、笑い皺はなくなり、妖しげな光を宿らせた瞳で風紗を貫く。

「た、崇矢さん？」

恐る恐る彼の名を呼ぶ風紗の唇を、彼はいきなり自らの唇で塞いだ。

「……っ！」

突然のキスに、風紗は驚愕から目を見張った。

でも、想像していたとおりの柔らかな感触、軀から漲る男の欲望に、風紗の全身に甘い愉悅の震えが走る。

いつの間にか、彼の両腕は風紗の軀に回されていた。力を込めて抱きしめられ、腰がさらに密着する。

（嘘！ 崇矢さん……わたし相手に硬くなってる！）

崇矢から逃れるべきだと心の声が囁いてくるが、貪るような彼のキスは何度も角度を変えて、風紗の理性を溶かしていく。風紗が空気を求めて息を吸うその隙を狙って、彼の濡れた舌が滑り込んできた。

「っんあ……」

蠢く舌の感触にぞくりと軀が震え、腰が甘く痺れていく。彼の愛撫で生まれたばかりの熱を煽られ、風紗はこのまま与えられる情熱に溺れたいという衝動に駆られた。

でも、これって遊ばれてるのでは？

崇矢から告白されたわけでもないのに、簡単に唇を許している自分に呆れる。

（冗談で好きって言われたけど、あれはまた違った意味。だから早く拒まなきゃ！）

風紗は理性を総動員して、その扇情的な口づけを拒むべく顔を背けた。踊り狂ったように打つ心臓に痛みを覚えながら、風紗はさらに彼を押し返そうとする。

でも、逆に引き寄せられ、彼の胸に頬を寄せる形で抱きしめられた。

「……興奮した？」

意地悪く耳元で囁かれた途端、今度こそ本気で崇矢を押し返した。風紗は顔を真っ赤にしながら、笑いを堪えている彼を睨みつける。

「……っ、こういうことは好きな女性にしてよ！」

「うん？ だから、したんだけど？」

しれっとした顔で答える崇矢に、地団駄を踏みたくなる。彼が本気で言っているのか、ただ風紗をからかっているのか、どうしてもわからない。

「違う！……そうじゃなくて」

その時だった。

「崇矢さん……、どこにいるの？」

佳織の声がいきなり耳に届いた。風紗は恐怖に見開いた瞳で崇矢を見上げるものの、彼は狼狽することもなく静かにこちらを見下ろしている。

どうして忘れていたのだろうか？ 彼は佳織の想い人だというのに。

（わたし……彼とキスをしてしまった。しかも、そのまま溺れたいと思うほどに）

自分の感情に戸惑いながら、慌てて崇矢の腕を掴む。

「ほらっ、……佳織さんが呼んでる」

早くこの部屋から追い出そうと、乱暴に彼をドアの方へ引つ張った。あと数歩でドアの取っ手に触れそうなどころまで来たのに、彼はいきなり足を止めて、チェストの上に飾ってあるいくつものクリスタルの置物の中から、リスのそれをそっと手に取る。

蛍光灯の明かりに反射したそれは、彼の手の上でキラキラと輝いていた。

「これ、まるで風紗みたいに可愛い。いいな、欲しいな……」

「あげる！」

それをあげるだけでなくに部屋から出ていってくれるなら、いくらでも差し出す。

「うわっ、マジ!? サンキュー。俺、大事にするから」

ドアの取っ手に触れる崇矢を見て、風紗がホッと安堵した直後、彼がいきなり振り返った。

「じゃ、また会おうな」

まだ何か話したいとでも言うのだろうか。

「いいえ。もう二度と会いたくありません」

風紗は咄嗟にそう口にしていた。

佳織の想い人とは、もう会いたくない。彼に触れられ、見つめられ、そして誘うような言葉が囁かれるだけで、自分がどうにかなくなってしまふことがわかったからだ。

これ以上変な感情が湧く前に、きっぱり関係を絶つのがいい。

だからこそ、今ここではつきりとその気はないと伝えておきたかった。

「……酷いな。もし、俺たちがもう一度出会うようなことがあったら？」

崇矢の手が取っ手から離れるのを見て、風紗は慌てて彼を見上げた。

（嘘！ お願ひ。早く佳織さんのもとへ行って……）

目で訴えるけど崇矢はそれを受け流し、挑戦的な態度でこちらへ一歩足を踏み出してきた。

もし傍に寄られたその瞬間、佳織がこの部屋へ入ってきたら？

佳織の痲痺と憎々しげな瞳が、風紗に向けられることになる。それだけは絶対に避けたい。

そうこうしている間に、崇矢は風紗の方へ歩いてくる。

早く、早く彼を止めなければ！

「……その時は、崇矢さんの言うことを何でも聞いてあげる！」

風紗の悲鳴にも似た声が、静かな部屋に響き渡った。

崇矢と視線が絡み合い、数十秒、何も言わずに見つめ合う。

不快な汗がこめかみを伝い、この張り詰めた空気に風紗が耐えられなくなった時、彼は何か面白いことを思いついたようにニヤッと笑った。その含みのある笑い方に嫌な予感を覚えて、風紗は思わず彼に人さし指を突きつけた。

「言っておきますけど、佳織さんに呼ばれてこの家で再会……というのは、今の約束には当てはまらないから！」

それだけは、はつきり釘を刺しておきたかった。どうせ、この先も佳織に誘われて、この家へ来るに決まっている。その時は大人しく彼と接するつもりだが、それをこの約束に含めたくはない。

この条件さえ守ってもらえれば、きつと彼の言うことを聞く機会はないだろう。ただそれを彼が了承してくれるか、それだけが問題だった。

拒まれるのを覚悟しつつ窺うように崇矢を見つめると、なんと彼は朗らかな表情を浮かべて頷いた。

「オーケー。その約束、忘れるなよ……風紗」

崇矢はまるでベッドの上で愛を交わしている最中のように、風紗の名前を甘く囁いた。

「もし、約束を破ったら……そうだな、ペナルティを与えるからそのつもりで」

ふたりは別の場所でもう一度会うと確信しているかのような彼の言葉に、風紗は戸惑いを覚えた。

そんな風紗に流し目を送った崇矢は、ポケットから何か小さな紙を取り出し、それをドアの傍にあるチェストの上に置く。

「そうそう。これ、リビングに忘れていたぞ」

一言そう告げてから、崇矢はやつとドアを開けて出ていった。

足音がどんどん遠ざかり、崇矢と佳織の声が耳に届いて初めて、風紗は安堵の息をつく。

「……良かった、佳織さんが部屋に飛び込んでくる前に彼を追い出すことができて」

もし、あの風紗の悲鳴に近い声が佳織の耳に届いていたら……と思った途端、崇矢に欲望を呼び起こされた時とはまた違う震えが軀に走った。

そのあとに起こる佳織の感情の爆発が容易に想像できたからだ。

風紗は、足をふらつかせながらゆっくりとベッドに近づいて腰を下ろした。

独りきりになれてホッと肩から力を抜くものの、何故か部屋から出ていく前に見せた崇矢の勝ち誇ったような表情が、頭の中でグルグルと回る。

「この家以外では、もう二度と会うつもりはないのに、どうしてあんなに自信満々に断言できるの？」
勝つのは風紗。崇矢と約束を交わしたが、彼の言うことを何でも聞いてあげる日が来ることは、絶対はない。

そう断言できるくらいきちんとした条件を出し、且つそれを受け入れてもらえた。にもかかわらず、あの崇矢の表情をどうしても頭の中から拭い去ることができない。

「わたし……大丈夫、よね？」

不安そうに響く声に自分でもゾツとして、凧紗は激しく頭を振った。その時、チェストの上に置かれた白いものが目の端に映る。崇矢が出ていく前にそこへ置いたものだった。

「いったい、何？ わたしが何を忘れたって言うの？」

ベッドから立ち上がり、崇矢が置いた白い紙を手取る。

「……これは、崇矢さんの名刺？ ああ、そういえば……自己紹介したんだった。わざわざ持つてこなくても、名刺なんていらなかった……のに」

そこまで口に出してからあることに気付き、凧紗の顔から一瞬にして血の気が引いた。

足がふらついて倒れそうになり、慌ててチェストに手を置いて体勢を整えるが、立つていられず力なくベッドに腰を下ろす。

「そういう……こと、だったのね。だから崇矢さんは自信満々に、わたしの条件を呑んだんだわ」何故、崇矢は凧紗が忘れた名刺をわざわざ置いていったのか……、理由はたつたひとつしかない。『まだまだ甘いな。この存在を忘れていただろ。さあ、俺のために……どんなことをしてくれるのか、楽しみにしているよ』

そんな崇矢の言葉が、幻聴となって聞こえてくる。

凧紗は、やりきれない思いを抱えながらベッドに仰向けに倒れた。

（バカ……、わたしのバカ！ 名刺交換をしたせいで、彼はわたしの勤務先を知っているのよ。もし彼がそこに来たら……いったいどうするのよ！）

大丈夫、彼がそこまでするはずがない——必死に自分に言い聞かせるが、頭のどこかでそんなに上手くいくわけがないとわかっていた。

今日初めて会ったばかりなのに、崇矢は何故か、凧紗を困らせるのが楽しくて仕方がないように見えたからだ。そんな彼が、凧紗を放っておくはずがない。

凧紗は腕で目を覆い、彼からどうやって逃げればいいのかと考える。

でも口から出るのは、力ないため息だけだった。

2

太陽の眩しい光が、青々とした街路樹の葉から射し込んでくる。

通勤途中の凧紗は思わず手を目の上にかざして立ち止まり、商業施設へ消えていく買い物客や、ビジネスマンといった行き交う人の流れを眺めた。

あの日から、もう一ヶ月以上経った。あの時凧紗の前に疾風の如く現れた崇矢とは、一度も会ってはいない。佳織のマンションを訪ねてくることもなければ、凧紗の仕事場にいきなり顔を出すようなこともしなかった。

正直、あんな風に凧紗を脅かしたのだから、遅くとも桜の花が散って葉桜となる四月中旬には、顔を突き合わせるようになるのではとビクビクしていた。

でも、彼は現れなかった。

突然待ち伏せされて、「ほら、会ったぞ」と声をかけられる可能性も考え、不安を抱えながらマンションと仕事を往復していたけど、そういうことも起こらない。

もしかしたら、目を置けば置くほど風紗が不安を抱くことがわかっているからあえて今は身を潜め、ゴールデンウィークあたりに忽然と姿を現すのでは？

考えられる再会のパターンを、風紗は想像できる範囲でいろいろと考えた。

しかし、それらの予想は風紗をあざ笑うかのようにことごとく外れた。

(これ以上、……崇矢さんのことばかり考えるなんてイヤよ)

仕事にも集中できないし、何より神経が過敏になりすぎていて、もう限界に近かった。

だんだん軀にも疲れを感じ始めた、ゴールデンウィークの最終日。

風紗は、彼の呪縛から解き放たれるために、区切りをつけることに決めた。あと一週間の間に崇矢が現れなければ、彼は最初から風紗に会うつもりはなく、ただ不安を抱かせるために口からまかせを言ったんだと。

そして一瞬間が経った。どこかで崇矢とばったり会うのではないかと、薄氷を踏む思いで毎日を通っていたが、それも今日で終わり！

自分で線を引いた日を無事に迎えられた喜びに、風紗は満面の笑みを浮かべた。

「やったー！」

周囲から向けられる冷たい視線を物ともせず、風紗は両腕を突き上げて胸いっぱい朝の清々し

い空気を吸い込む。

(崇矢さんの影に替えるのも、今日で終わり。ああ、なんて気持ちいいの！)

そう簡単に崇矢のことを忘れることはできないが、なるべく早く頭の中から追い出して、いつもの生活に戻ろう。

気持ち軽くなったせいか、面識もないショップの店員にまで手を振ってしまいそうになる。それほど風紗の心は躍っていた。

「……心機一転だよ。うん、今日からまた頑張ろう」

スキップしそうになる気持ちを抑えながら、風紗は綺麗に舗装された歩道を歩き始めた。

そうこうしていると、フィットネスクラブ「ブクア」の入った高層マンションが目に入る。クラブはその二階から四階を占めていて、風紗の働くカフェは二階にあった。

「おはようございます」

社員専用のロッカールームに入ったところで、カフェの責任者である宮森玲子と鉢合わせになる。彼女は管理栄養士で、風紗より六歳年上の先輩だった。

「おはよう。今日は忙しくなるわよ。ゴールデンウィークの旅行から戻ってきた奥さまたちの疲れも、そろそろ取れたころだから」

「そうですね。今日も頑張りますよ、玲子さん」

カフェの制服をロッカーから取り出し、白のシャツと茶色のプリーツミニスカートに着替える。

セミロングの髪は後ろでひとつにまとめ、乱れがないことを鏡で確認してから、すぐにカフェへ向

かった。

風紗は栄養士として就職したが、料理の献立を考えるだけでなく、調理から接客業務までしなければならず、知らず知らずのうちに気疲れしてしまうことも多かった。

それでもこうして仕事にやりがいを感じるのには、やっぱりどの仕事も好きだからだろう。

十一時オープンに向けて食材の下ごしらえをする宮森の横で、風紗は開店準備を始める。テーブルやガラスケースを拭き、続いて各テーブルに置く調味料の補充を終えると、今日使用する食器を保温ケースにセットし、コーヒー豆の補充をした。

「これでよし！ 玲子さん、そっちは大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう」

微笑む宮森に頷いてから、風紗は壁掛け時計を確認した。

十時四十五分。

クラブの周辺にある商業施設でショッピングを楽しんだ会員が、カフェに立ち寄ってお茶を楽しむこともあるが、開店直後に押し寄せることは滅多にない。

カフェで働くスタッフの皆にコーヒーでも用意しようと思ひ、風紗はサイフォンに手を伸ばす。

その時、*「グアカ」*の社長がいきなりカフェに入ってきた。

「スタッフ、皆こっちへ出てきてくれ」

風紗は慌ててカウンターから出て、まだ四十代の社長の前に立つ。三十代で起業した社長は、わずか十年で都心部に*「グアカ」*系列のフィットネスクラブを十店舗まで増やすことに成功した。

役員からはもつと店舗数を増やそうという声が出ているらしいが、社長は堅実派らしく、そういったことよりも会員が満足できる充実したクラブ作りを目指していると言われている。

「社長!？」

手を拭いながら出てきた宮森、そして調理担当のスタッフたちも慌てて風紗の横に並ぶ。

「全員出てきたか? ……よし。皆も知つてのとおり、この夏は全館大幅改修ツブベリをすることになっている。工事に向けて準備は順調に進んでいるんだが、今日からインテリアデザイナーのひとりが、ここのカフェの一角を使って仕事をする事になった」

「えっ? この一角を、ですか?」

驚きの声を上げる宮森の言葉に、社長が真顔で頷き、スタッフひとりひとりに目を向けていく。

「本日は事務所の一室を貸すことを提案したんだが、野瀬コーポレーションのデザイナーは*「グアカ」*に来る会員を観察してデザインを進めたいらしい」

(うん? 今、どこかで聞いたことのあるような会社名が……?)

風紗は眉根を寄せて、頭を掠めた何かを思い出そうと試みたが、明確なものは浮かばない。

でも、何故か嫌な予感がしてならない。

「デザインを担当してくれるその人物は、いろいろな賞を受けているトップクラスのデザイナーだ。その彼に頼まれた私は、より良い空間を作ってもらえるのならと、彼の要望を受け入れた」

社長の言葉で、一瞬スタッフたちがざわつく。

それもそのはず、和みの場なごでもあるカフェに業者が長時間居座っていれば、絶対に会員から苦情

が出るからだ。

しかも、「ブクア」の会員は普通の人々ではない。社長令嬢、夫人、経営者といった私の強い人も多いので、どんなことを言われるのか全く想像がつかない。だから、スタッフたちが不安を覚えるのも当然だった。

「皆が心配するのもわかる。だが、彼なら……なんとかかなりそうな予感がするんだ。もし苦情が出た場合、きちんと対応はするから、その人の名前と会員番号を書きとめておいてくれ。そうそう、彼は仕事が終わるまで、カフェに詰める予定だ。いつまでになるかわからないが、それまでは……、このスタッフと支店長に任せることにする。じゃ、そういうことで頼む」

社長はスタッフに向かって頷くと、踵かかとを返してカフェをあとにした。

「カフェの仕事だけでなく、そのインテリアデザイナーの世話まで、このスタッフが見なければならぬ……ってことね。八月までいろいろと忙しくなりそう。……さあ皆、準備を再開して！」

宮森の言葉でスタッフが慌てて持ち場に戻るが、凧紗だけはその場から動けなかった。

(……わたしの考えすぎよね?)

唇を噛み、襲いかかる何かから逃れるかのように、凧紗はカウンターの中へ戻った。

十二時を回ったころ、ブティックを経営している女社長の狩野夫人がカフェに入ってきた。凧紗は朗らかな笑みを心掛けて、ソファに腰を下ろした彼女に近づく。

「お久しぶりです、狩野さま。素敵な休暇を過ごされましたか？」

「ええ。買い付けも兼ねてヨーロッパを回ってきたんだけど、天気にも恵まれてとても楽しかったわ」
「まあ、それは本当に良かったです！ 雨に濡れる石畳も情緒も溢れていて、とても素晴らしいとは思ってですけど、お天気がいいとやっぱり気分が違いますもの」

「そうなのよ！ 凧紗ちゃんとおしゃべりするのは、本当に楽しいわ」

狩野夫人が人を褒め始めた時は、そろそろ独りにしてほしいという合図。そのことを表に出さないように気をつけつつ、「ありがとうございます」と応じてから、小さなメニューをテーブルに置いた。
「本日はどうされますか？」

「今日はゆっくりしたいだけなの。サラダボールとコナコーヒーをお願いします」

会員カードのバーコードを機械で読み取らせてもらい、すぐに注文のデータを厨房に送る。

「少々お待ちくださいませ」

凧紗は軽く頭を下げてから、カウンターへ戻った。コーヒー豆を挽いて準備をしていると、施設内で軽い運動を終えたか、もしくはリラクゼーションを満喫したらしき女性会員が、次々にカフェへ入ってくる。

他のスタッフが対応するのを横目で見ながら、コーヒーカップを準備し、ついでにデータで入ってきた注文の飲み物を準備し始めた。

「凧紗さん、ありがとうございます！」

今年入社した後輩の森下清美もりしたきよみに注文のアイステイーを渡すと、彼女は可愛らしくにっこりして、すぐにカフェフロアへ戻った。

「いつも元気いっぱいね……」

森下のはつらつとした姿を眺めていると、風紗はいきなり誰かに脇を小突かれた。

「確かに、元気の塊かたまりみたいで可愛いわよね。でも今のうちだけよ。清美ちゃん、まだ学生気分が抜け切れていないだけだから」

サラダボールをトレイに載せた宮森は、姉が妹を見守るような優しいな笑みで森下を見てから、風紗に目を戻した。

「でも、あたしも明るさでは負けないわ」

おちゃらけて言う宮森に、負けじと風紗も「わたしも負けません」と言い、ふたりしてクスクス笑みを交わした。

「じゃ、これよろしくね」

トレイを指したあと、宮森は再びカウンターの奥へ向かった。

風紗は保温ケースから取り出したカップにコナコーヒーを注ぐと、狩野夫人のテーブルにそれら運び、そしてすぐにカウンターへ戻った。

（フロアは他のスタッフに任せて、わたしは厨房へ行ってもいいかな？）

十五時にもなれば、アフタヌーンティーを楽しもうとする学生の会員も増えてくる。それに合わせて、カフェ名物のカップケーキの用意をした方がいいだろう。

お菓子担当の栄養士のもとへ行こうとした、まさにその時だった。

静かだったカフェフロアに、突然あざわざわめきが起こる。同時に、露あざわになった風紗の首筋に、チクチ

クと刺すような違和感が走った。

いったい何事？

不思議に思つて、ゆっくりと振り返つた風紗の目に飛び込んできたのは、支店長と一緒に歩くモデルのように背の高い男性だった。

その男性は黒いジーンズ、白いTシャツ、その上に茶色のチェック柄のシャツを羽織っていた。

素肌は見えないのに、それでも引き締まった体軀ていしゆをしていることがわかる。

もしかして、ダクアの新しいイメージモデルだろうか。

いや、社員の間でそんな噂は立っていないし、春の会報にもモデルが代わるという知らせは載っていないから、そうではないだろう。

でもカフェフロアにいる会員たちは頬をうつすらピンクに染め、うつとりとした表情を浮かべて、彼の姿を目で追っている。

もう一度その男性に目を向けると、彼は凶面を入れるような大きな黒いバッグ、そしてキャリアバッグを持っていた。

もしあの男性が新規の会員で、クラブの説明を受けているのなら、手荷物は入り口に設置してあるクロークに預けるだろう。

つまり、荷物を持ったまま移動している彼は、新規の会員ではない。

「彼は……いったい誰？」

風紗の囁き声が彼の耳に届いたのだろうか。支店長の方を向いていて、こちらからは背中しか見

えなかった彼が静かに振り返り、立ち止まっている風紗を見た。

その瞬間、風紗はハッと息を呑んで大きく目を見張った。

（嘘、でしょ？ まさか、そんな！）

そこにいたのは、藍沢崇矢その人だった。

風紗が自分の存在に気付いたと知った彼は、人当たりのいい笑顔を浮かべながらも、その瞳を妖しく煌めかせ、口角をかすかに上げる。

——ほら、何も小細工しなくてもまた会えただろ？ 俺たちがした約束、もちろん覚えていいるよな？

まるでそんな風にならずに傍で彼に囁かれたような気がして、恐怖とも期待ともつかないぞくぞくしたものが、風紗の軀を走り抜けた。

「崇矢さんの言うことを何でも聞いてあげる！」

考えなしに叫んだ自分の言葉が頭の中に甦り、見えない鎖となつて風紗を雁字搦めにしていく。

（ああ、わたしつたらなんてことを口走つてしまったのよ）

「あつ、水橋さん。彼を紹介しよう」

呆然と立ち尽くしていた風紗に気付いた支店長が、崇矢を伴つて近づいてくる。

「藍沢さん、彼女はここのカフェで栄養士として働いてる水橋です。水橋、彼は今回リノベーションのデザインを担当してくれる藍沢崇矢さんだ」

「藍沢です。……初めまして、水橋さん」

初めまして!?

間いかけるようにチラッと崇矢に目を向けると、彼は愛想のいい笑みを浮かべて手を差し出してきた。

握手なんてしたくない。でもこのまま躊躇していれば、支店長に不信感を抱かれることになる。

「……水橋です。どうぞ、よろしくお願いします」

後々面倒が起ることだけは、どうしても避けたい。

おやおずと手を差し出す風紗の手を、崇矢がきつく握った。普通の握手では考えられないその力に、風紗は息を呑み、窺うように彼を見つめる。

これからが楽しみだな——と言わんばかりに輝く彼の瞳を受け、風紗の胸は小鳥が羽ばたくようにざわめいた。

「宮森はいるかい？」

支店長は崇矢と風紗の間に流れる微妙な空気には気付かず、笑顔で風紗に話しかけてきた。それに乗じて、自分の手を彼の手から思い切り引き抜く。

「はい、今そこに……あつ、宮森さん！」

支店長の手前、キッチンから顔を覗かせた宮森に名字で呼びかけながら、風紗は崇矢に握られていた手をそっと背中に回した。その手は焼けるように熱くなり、第二の心臓かと思うほどジンジンと脈打っている。

「支店長!? どうされたんですか？」